

小学校三年生の時、母の誕生日プレゼントを買うために普段は家族で車で行っていた大型スーパーへ、学校終わりに初めて一人で自転車で行った。予算は五百円足らず。現代のように百円ショップのコーナーみたいなのがあった時代でもない。予算内で母が喜びそうな物を見つけようと、五階建ての子どもにとっては広大過ぎる売り場を下から上まで何回も行ったり来たりして、やっと処分セールのワゴンの中に四百数十円の茶碗蒸しの瀬戸物の器のセットを見つけた。外に出ると真暗で、帰りが遅い、と両親に叱られるだろうと泣きそうになりながら自転車をこいで帰った。

それから三十年以上。親になった私が、長男がまさにあの日の私と同じ三年生の時に、買い物に付き合ったことがある。貯めたお小遣いで母の日のプレゼントをこっそり買いたいから連れて行ってほしい、と。私は付き添いするだけで一切、口もお金も出さないと決めていた。あの頃とは違って大人でも気おされる巨大ショッピングモールの中を息子と並んで歩く。

「ここ入っていい？」

「訊かなくていいよ。入ったらいいじゃん」

普段は入ることのない女性物のショップに不安げに入ってキョロキョロ見回す息子。

「あ、お財布いいかも！」

と嬉しそうにガラスケースに近寄り、中の財布の値段に驚いて、

「ダメだ……」



絵・江口修平

## ふらいすれす

星田英利

と絶望のうめきを漏らす、が、無視。何かを見つけて首から下げた自分の財布の中のお金を数え直してため息をつく、が、無視。店員さんに話しかけられて、助けを求めようよにこっちを見た、が、無視。その後何とか一人で店員さんに意思を伝えられたのだろう、勧められた予算内のポーチのコーナーでひとつを手に取り、

「パパ、これどうかな？」

「ん？ パパが選ぶんじゃないから」

自信をつけた子どもは成長に天井はない。そして子どもの体力は大人には常に残酷だ。疲れきった私を引き連れ「次はあっち」「四階に行ってみる」「もう一回さっきのお財布の店に戻ってみる」と縦横無尽に何軒回っただろうか。アクセサリーの店でやっと珠玉の一品を見つけたらしく、もう私に何も訊くことなく一人で入店し、選び、支払い、プレゼント包装をしてもらい、外のソファアールで待つ私の元に意気揚々と戻ってきた。

遅い帰宅を妻に説明する息子。

「心配するでしょー、電話も出ないし！」

玄関で息子が、そして私も叱られた。

「……でもありがとね」

妻が息子を抱きしめた。愛しそうに頬ずりする妻と、すごく嬉しそうに少し自慢げな息子の顔を見つめながら懐かしくて胸がきゅっとなった。そう、三十数年前のあの日、やっぱり私も母にそうされたのだった。

ほしだ・ひでとし●俳優。1971年大阪府生まれ。R-1ぐらんぷり2005にて優勝。現在、俳優として映画・ドラマを中心に活動中。日本テレビドラマ「ブラック校則」、テレビ東京ドラマ「宮本から君へ」、NHK連続テレビ小説「カーネーション」「おちょやん」ほか多数出演。

